

充実した地域子育て支援活動をめざして2

本 村 弥 寿 子

Full childcare support for parents Report 2

Yasuko MOTOMURA

キーワード：子育て支援 子育て保護者 わくわく講座

1 はじめに

近年、都市化、核家族化、少子化、情報化などの社会状況が変化する中で、子育て中の保護者が子どもへのかかわり方に悩んだり、孤立感や不安感を募らせたりといった様々な状況が指摘されている。これを受け、幼稚園教育要領には、“幼稚園が子育ての支援のために、地域における幼児期の教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること”と、そして、保育所保育指針には、“入所する子どもの保護者に対する支援及び地域の子育て家庭への支援に積極的に取り組むこと”と明記されている。

本学の附属幼稚園は、未就園児対象の子育て支援として「わくわくクラブ」を設置している。子育てについて楽しみながら学ぶことを目的とし、月に2回実施している子育て支援事業である。4年前からは、本学の「地域子育て支援室」と連携し、「わくわく講座」を開講した。本学の教官や地域の様々な専門家を招き、支援講座・情報提供・子育て相談等、親子の触れ合いや学びを深められるよう支援している。

冒頭に記したように、子育て支援活動は、幼稚園や保育所に課せられた、今の社会に欠かせない活動である。ここで「わくわく講座」の今年度の取り組みを振り返り、次年度からの取り組みを一層充実させるための一助としたい。

2 平成26年度「わくわく講座」の取り組み

2-1 平成25年度の課題

平成25年度の「わくわく講座」は、参加親子が横のつながりを築いていくことを第1の目標として取り組みを進めた。たとえば、講座の内容を他の親子とかかわる機会を取り入れたものにしたたり、ノンプログラムの時間帯に親同士・子ども同士がかかわれるよう、教諭や講師が仲介役を果たしたりした。昨年度は、「わくわく講座」を開講して3年目となったことから、参加親子が互いに顔見知りになり、かかわることへの抵抗感が無くなり、回を重ねるごとに雰囲気や和やかさを増していった。参加者数も毎回およそ15組と、触れ合うためにはちょうどよい参加者数であったことも功を奏した要因の一つであるととらえる。このように、「わくわく講座」は、徐々に地域に馴染み参加者にとって“楽しめる場所”となってきたと感じられた。

そこで、これを維持するためにも、子育て保護者が求める講座を開講し充実させることが大きな課題となった。

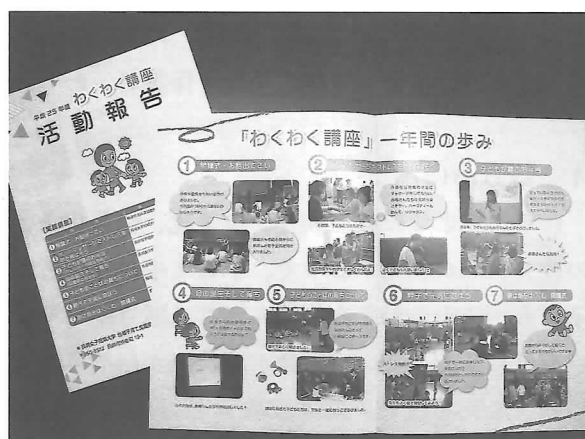
2-2 平成26年度の内容検討

これまでの参加親子が“また参加してみよう”“友達を誘ってみよう”と思える内容を探るため、「わくわくクラブ」や「わくわく講座」で参加親子と積極的に会話を交わしたり、年度末にアン

平成26年度「わくわく講座」計画

(於長崎女子短大附属幼稚園)

	日時	内容及び講師
1	5月29日(木) 11:00~12:00	開講式 「やってみよう! 絵本の読み聞かせ」 時津町立時津図書館 司書 豊島亮子氏
2	6月30日(月) 11:00~12:00	「子どもが喜ぶ簡単メニュー」 栄養士コース 講師 古賀克彦氏
3	9月11日(木) 11:00~12:00	「歌って遊ぼう」 幼児教育学科 講師 中村浩美氏
4	10月9日(木) 11:00~12:00	「親子で楽しむ造形遊び」 幼児教育学科 助教 昆 正子氏
5	11月20日(木) 11:00~12:00	「『困ったな…どうしよう…』 子どもへの対応の仕方」 幼児教育学科 助教 福井謙一郎氏
6	12月15日(月) 11:00~12:00	「元気に遊ぼう」 幼児教育学科 教授 下釜綾子氏
7	2月23日(月) 11:00~12:00	「お姉さんたちと遊ぼう」 幼児教育学科 講師 本村弥寿子氏
		閉講式



上：チラシとリーフレット
下：リーフレットの内容

ケートを実施したりした。これまでの講座の中で参加人数の多かったものの洗い出しも行った。さらに、大学の専門性を生かせるものや地域との連携を取り入れたものを組み込むようにした。

そこで今年度は、これまで人気のあった絵本の読み聞かせや歌遊び等に加え、新たに造形遊び、子どもへの対応の仕方についてなど、新たな内容も取り入れることとした。

2-3 チラシ・リーフレットの作成

開講から3年間、本講座への参加を促すために、年間計画を載せたチラシを自作し配布していた。今年度は、印刷会社に依頼し、色鮮やかで紙質の良いチラシを作成した。また、本講座を理解してもらうことを目的とし、1年間の取り組みを写真で紹介するリーフレット(「平成25年度活動報告」)も作成した。

このチラシとリーフレットは地域自治会や小学

校等関係機関、そして今年度1回目の講座の参加者に配布した。きれいに印刷されたものであるため、子育て中の家庭以外の人も丁寧に目を通していった。また、チラシとリーフレットを用いることで、初めて参加する親子への「わくわく講座」の説明が行いやすくなった。

2-4 講座の様子

2-4-1 「やってみよう! 絵本の読み聞かせ」

昨年度好評で、保護者から再度聞きたいという要望があったことから、今年度も地域の図書館司書を招いて開講した。3冊の絵本を読み聞かせ、絵本の魅力や読み聞かせのポイントをわかりやすく伝えてもらうのは昨年と同じであったが、今年度は親子で読み聞かせを行う時間を15分設けてみた。講師から学んだことをすぐに実践できたため、読み聞かせのポイントが十分に理解できたようであった。

さらに、指人形を使つての“親子で楽しめるお話づくり”も新しく経験できた

保護者からは、「上手に読まなくてはと、気負わなくていいですね」「指人形、かわいいですね。やってみます。」などの感想があがった。家庭ですぐに実践できる内容であったため、保護者の満足度が高かったようである。

また、本学幼児教育学科の2年生が13名ボランティアとして参加できた。講座の途中で集中の切れた子どもの遊び相手となったり、講話を聴いたり、保育者をめざす学生にとってよい学びの場となった。特に、講師が実演した擬音語だけの絵本は、「読み方が分からないから」と敬遠しがちな絵本であったため、素晴らしい手本を見る機会となった。



2-4-2 「子どもが喜ぶ簡単メニュー」

食育は、子育て中の保護者がとても関心を示すもののひとつである。これも昨年度に引き続いて取り入れた。



大人の食事は体を維持するためのものであるが、子どもの食事は体の維持に加えて体の成長を支えるものでもある。子どもの食事は大人のそれ以上に考慮したメニューとしなければならない。この講座では、子どもの食事を考える際のポイントが理解しやすく盛り込まれていた。さらに、子どもが好むメニューのレシピを資料として配布してもらった。

参加した保護者は、単に大人の食事の量を少なくしたものが子ども向けの食事ではないことに大きくうなずき、熱心に話を聞いたり資料を見たりしていた。コンビニエンスストアなどの弁当で済ませる親が増え、子どもの食が危ないと叫ばれる社会状況であるが、講座に参加している保護者たちの熱心な姿に少し安心感を覚えた。

配布したレシピは大変好評であった。「助かる！」とつぶやく保護者が多く、今回の内容が子育て保護者のニーズに合ったものであったと確認することができた。

2-4-3 「歌って遊ぼう」

この講座も、非常に要望が多かったものである。親子で歌ったり体を動かしてリズム遊びをしたりと、心身ともにリラックスして楽しめる内容だからであろう。そのため、昨年度は1月、つまり最後の講座として取り入れていたが、参加親子が1年間の取り組みの早い時期にリラックスできるようにと考え、今年度は開講時期を9月と早めた。

「わくわく講座」は、本学附属幼稚園のプレイルームで行っている。しかし、この講座はプレイ

ルームを使用できず、急遽空いた保育室に変更した。保育室はプレイルームの約3分の1の広さである。親子がのびのびと過ごすことができるのかと心配しながらの活動となった。しかし、実際の活動はとても実りのあるものとなった。まず、参加者が17組という人数だったことがあげられる。これまでの講座で一番参加者が多かった時は30組ほどだった。多くては保育室では活動できない。保育室でも大丈夫な人数に偶然ではあるが助けられた。また、プレイルームでの活動より、隣の人との距離が近くなったこともあげられる。他の親子の姿がすぐ目に入るの、子どもが互いに興味を持ち、かかわり（触ったり見つめたり）を持つとしていた。保護者も会話しやすかったようである。さらに、子どもが母親から離れて動き回っても目や手が届きやすく、子どもの管理がしっかりできていたことも講座が充実した要因の一つであろう。講座はプレイルームで行うと決めてしまわず、内容に応じて場所を考えることも、講座を充実したものにする工夫の一つだと気付かされた。

そして、もう一つ、資料としての楽譜配布についてである。昨年度は講座の初めに配布した。保護者が楽譜を見ながら歌えるようにしたのである。しかし、楽譜を見ながらでは顔が下を向くことになるため、声が出ていなかった。そこで今年度は配布を取りやめ、歌うことに専念できるように配慮した。これが功を奏し、保護者の声がよく出ていた。親が歌うため、もちろん子どもも歌っていた。小さな工夫や配慮次第で充実度が大きくなることを実感した講座となった。



2-4-4 「親子で楽しむ造形遊び」

「わくわくクラブ」では製作遊びをよく取り入れているが、講座での造形遊びは初めてであった。今年度本学に着任した、造形教育を専門とする講師による講座ということで、19組もの親子が参加した。

今回は、小さな子どもでも楽しめる“スタンプ遊び”を展開した。保育室に模造紙を敷き詰め、その上に一人ひとり画用紙を置き、カップや段ボール等身近な材料を使って行った。身近なものを使ったため参加者にまったく抵抗感や戸惑いがなく、「ここにポンってしてごらん」「見て、ママ！」など会話を楽しみながら親子で自由にのびのびと楽しむ姿が見られた。隣の親子とも会話を楽しむ姿が見られ、ここでも、周囲の親子との距離が近くなる保育室での活動の良さを実感した。最後は作品でカレンダーをつくり、持ち帰って飾れるよう工夫した。思いがけず“お土産”ができ、参加者にとっても好評だった。

先にも述べたが、この講座も保育室で行った。大がかりな環境構成となったため、講座の直前まで準備を行った。そこで、プレイルームに自由に遊べる環境を整え、早く来園した親子が開始時間まで遊びながら過ごせる場を用意した。プレイルームは講座終了まで自由に出入りできるようにしたため、スタンプ遊びが一段落した親子が、周囲に気兼ねすることなく過ごすことができた場となった。附属幼稚園在園児の保育に支障がなければ、必要に応じて複数の部屋を確保し、参加親子が存分に楽しめるよう配慮することが大切だと



感じた。

この時に初めて「わくわく講座」に参加した保護者が「今日来てよかった。スタンプ遊びでよかった」と、非常に喜んでいて。準備や片付けが大変な造形遊びであったが、実践してよかったと思える講座だった。

2-4-5 「『困ったな…どうしよう…』～子どもへの対応の仕方」

本学の心理学担当教官が講師を務めた講座である。これも「わくわく講座」において初めての内容で、親子間の「愛着」に焦点を当てた。大人が「困ったな」「問題だな」と思う行動をとる子どもは、親との愛着形成ができていない場合がほとんどであり、どのようにして親子の「愛着」を深めればよいのかについて、パワーポイントで分かりやすく進めていった。講演後、「忙しい時は、雑に（子どもに）かかわるから反省しました。」と、参加した保護者の一人が感想を話しに来た。このように、日頃の子どもとのかかわり方を振り返った親がほとんどであろう。親子の関係を見直す良い機会となったようだ。

この講座は座学であるため、子どもが最後まで親と一緒にいることができない場合もあると予想を立てた。そこで、会場の保育室後方に、子どもが座って楽しめるブロックやビーズコースターなどの遊具を準備した。走り回るスペースはなく、保護者も自分の隣で子どもを遊ばせられたため落ち着いて講座を聞くことができたようであった。「歌遊び」や「造形遊び」の経験から会場を保育



室にしたことはよい選択であった。

2-4-6 「元気に遊ぼう」

昨年度、非常に好評だった講座の一つである。この日、講座の最後に“クリスマス会”が行われることも手伝い、24組の親子が参加した。親子で元気にのびのびと活動できるよう、プレイルームで行った。

体と心をほぐす手遊びや体操、跳び縄ほどの長さのロープや大きなお手玉状のビーンバッグを使った親子遊びと、どれも単純な遊びであったが、子どもは笑顔で存分に動き回り、保護者もよい表情で活動していた。「こんな簡単な遊びでも、楽しめるんですね」という保護者の声が多く聞かれた。講師は、今鍛えられている部分がどこであるかを活動しながら伝えていた。それを保護者は大きくうなずきながら聞いていた。子どもの動きに無駄なものはない。子どもにとって遊びは意味あるものだと実感できたのではないだろうか。



2-4-7 「お姉さんたちと遊ぼう」

今年度最後の講座である。幼児教育学科の2年生十名ほどが、短大での2年間の学びを実践に取り入れたものになりたいと考えている。参加親子がこれまでとは異なる内容を経験できるよう、そして学生にとっても学びの機会となるよう、担当講師が支えていきたい。

2-5 取り組みを振り返って

昨年度同様、各講座の参加親子は15組前後で、程よい人数であった。一組の親子が何度も講座に参加し、互いに顔見知りになって自然にかかわりを持てるようになった1年であった。このことから、本学の「地域子育て支援活動」が地域に馴染んできたといえよう。今年度、私たちは、初参加または2回目という親子が、目立つことなくスムーズに講座に参加していた感を強く抱いた。「わくわく講座」を初めて約2年間は、参加親子の表情が硬く、よそよそしさを感じるがあったが、それが全くなかったのである。参加親子が講座に慣れ、穏やかな気持ちで参加していることで、活動全体の雰囲気や和らいだのではないだろうか。それで新規の親子も緊張感を持つことなく参加できたのかもしれない。このような、子育て中の親子を温かく迎え入れる良い雰囲気は、これから崩すことのないよう、支援者側として一層努力にしていくことが大切である。

さて、先に、毎回の講座の参加親子が約15組と述べたが、20組を超えるときもあり、今年度の参加人数はのべ220名を超えた。これは、4年間の「わくわく講座」の取り組みの中で最も多い人数である。

多くの人に、本学の「地域子育て支援活動」を知ってもらい、多くの親子に参加してほしいという願いを持ち、4年間取り組んできた。そのために、子育て保護者が求めている内容、親子が安心して楽しめる内容を探り、大学の専門性を生かしながら取り入れる努力を重ねてきた。たとえば、これまでの講座で特に好評だったものを、プログラムを少し変えて再度取り入れたり、新たな分野

の内容を子育て中の親子向けに工夫したりして取り入れた点である。その努力が少しずつ実ったと考えている。

しかし、今年度、「何を行うか」だけではなく、「どのように行うか」という視点も、講座を充実させるために重要であることを実感した。それは、まず、主たる会場のプレイルームではなく、保育室を使用したことで一層充実した講座が行えることを経験して感じたことである。そして、「歌遊び」では、資料を提示しないことが参加者を活動に集中させるきっかけとなったことでも感じられた。さらに、新しい取り組みである「造形遊び」においては、座卓で行える活動を、敢えて保育室全体に模造紙を敷き詰めることで、体全体を使っのびのびと取り組めるようにしたことでも実感した。これまでの活動から、子育て中の保護者やその子どもが喜び、進んで参加したいと思うものはどのような活動であるかを把握できるようになった。これからは、活動がマンネリ化しないよう、そして、参加親子にどのような経験をしてほしいかという目的も明確に持ち、目的を達成するためにどの内容をどこでどのように展開していくか、入念に考えることが重要と言えるだろう。

大学の専門性を生かした子育て支援活動を行うために、今年度は、学生ボランティアを募る呼びかけを多く試みた。しかし、結果的には第1回目と最後の回のみとなった。呼びかけが足りなかったり、学生の意識を高める工夫がまだまだ必要だったり、「地域子育て支援室」が学生に対して努力すべき点は多くある。しかし、本学は短期大学であるため、学生は1日中授業があり、ボランティアに参加したくともできない現実がある。幼児教育学科の2年生の中には授業が入っていない時間と講座の開講時間が重なる学生もいるが、「わくわく講座」の開講曜日が月曜か木曜と固定しているため、いつも決まった学生しか参加できないことになる。講座内容は、子育て中の親子向けに考えられたものであるが、これから保育者となる学生にとっても有益なものが多い。学生の参加を考えるのであれば、附属幼稚園と連携を取り

合い授業内容とリンクさせ、授業の一環として参加できるようにするなど考慮する必要があるだろう。

3 これからの展望

本学の「地域子育て支援室」が中心となり、附属幼稚園と連携を図りながら行っている「わくわく講座」も、4年間の取り組みにより地域に馴染んだものとなった。参加親子も毎回和やかな様子で活動に取り組み、親子のかかわりはもちろん、他の参加親子とのかかわりも広がりがみられるようになった。“安心して、自信をもって子育てに取り組んでほしい”“子育て保護者同士、繋がりを持ってほしい”といった我々の願いが、少しずつ実現していることをようやく感じられるようになってきた。地域子育て支援活動は、継続して行うことが重要である。我々も、4年かけてようやく目指しているものが見えてきたと感じている。これからますます、子育てに悩む保護者が増加していくことであろう。子育て中の保護者が困った時にすぐ手を差し伸べられるようにするためにも、地道に活動を続け、地域に根を広げておくことが重要であると考えます。子育て中の保護者や子どもにとって常に魅力ある講座であるために、先に述べたように、大学の専門性を生かしながら内容を充実させる努力を怠らないようにしたい。

また、本学は、子育て中の保護者の支援や保育関係者への支援のために、今年度8月に、「保護者支援・教育研究所」を設置した。これからは、この研究所とも連携し、より一層充実した支援を行いたいと考えている。

4 おわりに

ようやく軌道に乗ってきたと感じられる「わくわく講座」である。我々支援者側も講座の回数を重ねるごとに講座参加者への親しみが増していった。子育て支援活動は人と人とのかかわりが大切である。互いに親しみをもち大切に思うことで、相手の求める支援が行えると感じている。

講座を充実したものとするために培ってきたも

のを生かしつつ、「保護者支援・教育研究所」との連携により、支援内容を充実させ、子育て保護者が自立して自分の子育てをしっかりと行えるよう支えていきたい。

引用・参考文献

- 1) 2008年「平成20年告示 幼稚園教育要領・保育所保育指針<原本>」 チャイルド本社
- 2) 2010年「演習・保育内容総論」 豊田和子 (株) みらい
- 3) 浦川末子 長崎女子短期大学紀要第36号 p30~36 (2012)
- 4) 浦川末子、本村弥寿子 長崎女子短期大学紀要第37号 p53~60 (2013)
- 5) 本村弥寿子 長崎女子短期大学紀要第38号 p108~114 (2014)
- 6) 2011年「家庭支援論」吉田真理 萌文書林

